

連載 それぞれのアスベスト禍 その73

中皮腫・アスベスト疾患・患者と家族の会 古川和子

中皮腫発症8年目

まだ生きてます。しっかりと元気に 割と普通に生活してます。

現状報告するならば今までとほとんど変わりなく痛みが左胸背中にかけてあるのでレスキューを一日二回服用（30mg）してそれで間に合っている。その他では三か月前位から嘔声がある。鎖骨や心窩部に腫瘍があったのでいずれ反回神経麻痺がおこるだろうと予測していたが実際に声が出にくくなると今まで通りには会話が成立しなくて不便なことが多い。それ以外は特に変わりなく主治医も「無治療でここまで長生きしている人は今までいません」と言ってくれる。

大きな病気になったのにこれだけ自由気ままに生活してそのうえ思いのほか元気な状態で長生きできてる私。発症した頃の人生の予測は大きく裏切られこんな筈ではなかったのだと思う。真央ちゃんに言わせれば「私の人生での大きな出来事ではない」だろうけど凡人の私には病気になったのは人生で大きな大きな出来事だった。

だからそれに焦点を合わせて人生設計を立てていたのにまさかの誤算で新たな人生設計を考えなければならぬ事態だ。

これからは病人のワードは端っこに置い

といて今までとは少し違った見方生き方にしていこう。

そんなことを思う今日この頃です。

これは、河村三枝さん（57歳）のブログの一節だ。河村さんは2010年2月に胸膜中皮腫と診断されたときはすでにリンパ節に転移があり「ステージ4」で手術適応外だった。

2011年12月の「広島・山口支部」の集会で初めて河村さんと出会った。その時の河村さんはどこでアスベストを吸ったのかわからなくて、環境省の実施する石綿救済法の認定を受けていた。そして私は「どこでアスベストを吸ったのか知りたい」という河村さんに「きっとばく露原因があるはず」と調査を約束した。

いつも通りの消去法で調べていくうちに「もしかしたら」と思いついたのが、産婦人科医院に勤務していた時のゴム手袋再生作業だった。

河村さんは1981年6月～86年1月、山口県の産婦人科病院に勤務していたとき月に2～3回、使用済みのゴム手袋を再利用するためガス滅菌する前、洗って乾かした手袋がくっつかないように「タルク」と呼ばれる打ち粉をまぶす作業をしていた。その際、打ち粉の中に含まれていたアスベストを吸い込んだのだ。

しかし看護師さんのそのような事例はない。その当時の「粉」がタルクだったという証拠はない。ましてアスベストが混入していたかどうか不明だ。

労災請求をしてもかなり困難な事例になるかもしれないと思い、あれこれ悩んでいた。そのような時関西労働者安全センターの片岡明彦事務局次長が「どうせやるなら、早く出せばいい」と言ってくれた。ポンと背中を押されて、一気に準備した。

ほどなく、ひょうご労働安全センターの西山和宏事務局長の協力のもと山口労働基準監督署に労災休業補償請求を行った。そして山口労基署が労災認定したのは2012年7月24日付だった。「手術用手袋の粉で中皮腫 元准看護師の石綿労災認定」という見出しが全国を駆け回った。日本看護協会にも大きな衝撃を与えたという。(詳細は本誌2012年10月号「それぞれのアスベスト禍その26」)

残されたものを大事に

最近思う事は、中皮腫8年生らしからないと言うか、8年生だからこそか、色々な心の葛藤が生まれてくる。

と河村さんはブログに書いている。先日久しぶりに電話で長い時間おしゃべりした。かつての河村さんは、少しハスキーで明るい声だった。しかしいまは違う。「家族との会話も通じにくくなり、イライラする 때가あります」と言っている。最初は河村さんも気を遣いながら「こんな声でごめんなさい」と言っていたが徐々に緊張がほぐ



新宿駅西口で街宣車によって訴える河村さん 2015年5月

れてきたようだ。

河村さんは必ず私の健康も気遣ってくれる。今回も「膝の方は大丈夫ですか？眼は大丈夫ですか？」と最初に尋ねてくれた。そしてお互いに「こんな薬飲んでいる」と語り合う。元看護師の河村さんには私の薬の話はとてもよく通じる。

先日もさんざんお喋りしたあとに、河村さんは言った。「そうですね、いま残されているものを大事にして生きて行けばいいのですね」と。会話が不自由になってもパソコンのキーボードは打てるのだ。

「時々 大きな声で叫びたくなる。私は今生きているぞ〜っと」と河村さんがブログで書いているように、生きていることを実感できる日々であってほしい。

中皮腫患者の河村三枝さんではなく、河村三枝さんが中皮腫になったのだから。

